

## 「バート・フランクリン文庫」の調査の思い出

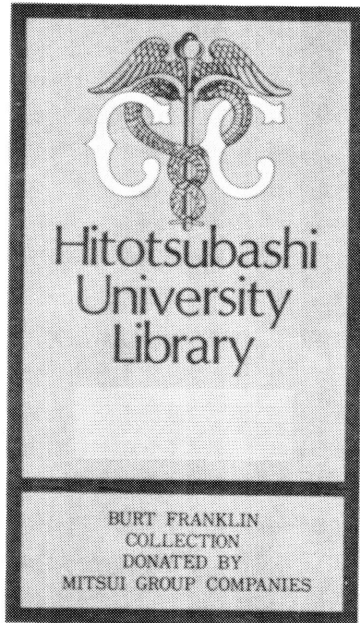
細谷新治

1974年、三井グループ22社の寄附金と、文部省の援助によって一橋大学にはいった「フランクリン文庫」（正式名称は、Burt Franklin Collection—Donated by Mitsui Group Companies である。以下「文庫」と略称する。）の入手の経過については、この「文庫」を大学へ入れるために終始、陣頭指揮をとられた、当時の学長、都留重人名誉教授による「“Burt Franklin Collection—Donated by Mitsui Group Companies” 入手の経緯」（「一橋大学附属図書館史」一橋大学、昭和50年）にくわしく述べられている。わたしは、1973年2月、現地ニューヨークで「文庫」を調査する作業を担当し、またそれが縁となって、「文庫」が大学にはいってからも引きつづき「文庫」の整理、運用に関係することとなった。そこで今回あたえられた機会を利用して、現地調査の思い出と、「文庫」が大学にはいってからの整理の経過の概要を記して、都留先生によって書かれた上記の記録の補足としたい。

社会学部の古賀英三郎教授、経済研究所の津田内匠教授とわたしが学長室に呼ばれ、「文庫」から選ばれた約2千件の書名カードと概要書を見たのは、1973年1月29日の3時過ぎであった。学長は、このカードを点検して「文庫」が百万ドルに価するコレクションであるかどうか即答してほしいといわれる。わたしたち3人は、それはとても無理だと答えたが、とにかく拝見しようと、すぐカードの点検をはじめた。結論が出るのにそんなに時間はかからなかったと記憶している。カードに記載された書物は、英・米・仏の経済思想史を中心とした社会科学古典の見事なコレクションであった。もし残りの1万数千件の文献がこれに匹敵する内容をもっていれば、この「文庫」は、「メンガー文庫」につぐ今世紀最大の経済学書のコレクションであることは間違いない。わたしたち3人は、はじめのしりごみはどこへやら消しとんで、学長に、この「文庫」は絶対前向きの姿勢で調査すべきであろう、その結果、わたしたちの予想どおりのものであるならば、大学として購入することを是非考えていただきたい、一橋大学の百周年を記念する最高の事業ではないだろうかと力説した。

1月31日の3時ごろ、東大附属図書館にいたわたしに、石川滋経済研究所長から電話があった。すぐニューヨークへ発って「文庫」を調査してほしいという学長の依頼である。4時半ごろ、研究所の都留研究室にうかがって、わたしはとてもその任ではるいとお断りしたが、「君の調査は、大学が「文庫」を購入するための前提条件とはしない、大学がすぐ派遣できる人間としては、君が一番差しさわりのないのだから曲げて承知してほしい」と学長にいわれ、同席した石川所長の口添えもあってついに承諾するはめになってしまった。わたしは、大急ぎで渡米の手続きをはじめ、その間に調査の準備を進めた。滞在期間は2週間であり、途中の休日はずすと調査期間は、正味一週間から10日以内である。東京でできる予備調査の資料としては約2千件のカードだけで、かんじんののこりの1万数千件の文献に関する資料はない。そこでフランクリン氏から「文庫」の売却を依頼された、フ氏の経営するLenox Hill社（復刻本の刊行書店）の日本における代理店であり、友人でもあった、ユナイテッド・パブリッシャーズ・サーヴィセズ会社の斉藤純生氏に頼んで、幸いにフ氏が1970年6月4日に斉藤氏にあてた手紙を手に入れることができた。あとで斉藤氏からきいたことであるが、フ氏が斉藤氏にはじめて自分の蔵書を日本で売却してほしいという話をしたのは、前年の6月、コネティカット州のある町にあるフ氏の山荘に招待されたときであった。フ氏は、そのとき同業の有力者を招いてパーティーを開き、山荘の一室にあった蔵書

を一同に見せたようである。フ氏は、1972年、ニューヨークで白血病のため亡くなったが、その当時はまだ元気で、齊藤氏らとゴルフコースを廻り、そこで売却の話ができたようである。冊数は正確にわからないが約2万件、価格は百万ドルであるという。齊藤氏は、しばらくこの話をそのまま放置していたが、翌年にはいってフ氏の話を進めることとし、彼に文庫の内容を知らせてほしいと連絡をした。それに対する返事がこの6月4日付けの手紙である。



佐善明氏(千葉大学)デザインによる「文庫」の蔵書票

「クレス文庫」、コロンビア大学の「セリグマン文庫」に及ばないが、質においては決してそれに劣らない、資本主義の歴史に関する最良のコレクションであるといっている。「クレス文庫」は、ケンブリッジ大学のフォクスウェル(H.S. Foxwell, 1849～1936)教授の第2コレクションであり、「セリグマン文庫」は、コロンビア大学のセリグマン(E. R. A. Seligman, 1861～1939)教授のコレクションである。この2つの文庫と、フォクスウェル教授の第1コレクション(ロンドン大学の「ゴールドスミス文庫」)、および一橋大学の「メンガー文庫」は、世界における経済学古典の4大文庫といわれている。フ氏は、「メンガー文庫」ももちろん知っている。彼の事務所にあった収集のための参考図書のなかに「メンガー文庫」の目録があった。

フ氏の手紙は、さらに「文庫」の持っている文献を、1 マニュスクリプト、2 法令資料、3 官庁資料、4 書物とパンフレット、5 雑誌、の5種類にわけて重要な文献の解題を試みている。そこには、1300年に作成されたマグナ・カルタからはじまって、インクynaブラでは、J. Nider, P. de Crescenzi の著作、メヂチ家の帳簿、フランスの封建貴族ロブリエール侯爵家の14世紀から18世紀にかけて400年におよぶ記録27巻、E. Cabet, Ch. Fourierなどの思想家の手紙がみられ、また経済思想史、政治思想史、社会思想史上の重要人物が数十名あげられている。フ氏がとくに強調しているのは、「クレス文庫」、「セリグマン文庫」にない文献を意識的に集めるように心がけたということであり、2つの文庫にない、英、米、仏、伊、オランダの政治史、経済史、社会史の重要な史料についてもくわしく述べている。わたしは、この手紙を検討した結果、まずここに書かれている書物、史料が現地に揃っているかどうかを確認することを第1の作業の目標とし、余力があれば、この手紙にあげられていないが、カードにはある著作を点検することを第2の作業目標とすることとした。

わたしと齊藤氏と、日本における販売をはじめ担当する予定であったオリエンタル・ブックスレーズの岩井宏維氏の3人が羽田を発ったのは、2月10日である。岩井氏は、この時点では取引の当事者になることを断念し、わたしの調査の協力者として同行することとなった。同日ニュー

ヨークに着き、その日と翌日の11日の日曜日は休養し、12日の朝、東44丁目にあるフ氏の事務所を訪れた。宿舎のドレーク・ホテルのあるパーク・アヴェニューを東へ向って5分ほど行くと米国三井物産のあるパンナム・ビルがある。わたしたちは、まず物産を訪ね、武内社長、須永次長に会って到着のあいさつをし、今後の予定を知らせた。フ氏の事務所は、パンナム・ビルの横から東44丁目へ出るとすぐ左側にあった。2階建ての小さな建物で、1階はがらんとした倉庫のようになっており、2階が事務室である。ビジネス・マネージャーのカプラン (Kaplan) 氏とライブラリアンのゼンベリ (Alfred F. Zambelli) 氏が迎えてくれた。おどろいたことには、すでにフ氏のコレクションの一部は箱詰めされており、競売のためにニューヨークのギャラリーに発送するばかりになっていた。わたしたちが出発する直前の状況は、都留先生の記録にあるように、エセル未亡人の代理弁護士であるグッゲンハイマー氏から齊藤氏あてに2月6日付けで、競売することに決めたので「再考の余地なし、ご諒承を請う」という電報がきていたのである。齊藤氏は、すぐエセル未亡人の財産管理人であるシュノル (Schnoll) 氏に会って競売の中止を申し入れた。さらにグッゲンハイマー弁護士の了承もとった。問題は、未亡人の説得である。齊藤氏は、フロリダの別荘にいたエセルにニューヨークに帰ってもらい、市内の有名な高級アパートメント「ロンバルディー」に住居をもつ彼女を訪ねて早速、説得にかかった。「あのときは、わたしも必死でした。羽田を発つまでには米国三井物産が購入するということがまだ決っていなかったが、わたしとしては、とにかく目の前の競売を中止させ、「文庫」の散佚を防ぐためには、物産が必ず買うからといわざるをえなかった。その時点では、わたしは、「文庫」を買う日本のバイヤーの立場ではなく、フランクリン家の側に立っていたから、かえって説得力があったのでしょう。最後の決め手は、あなたは、「文庫」を一括してどこかの大学へ売却し、自分の名前をのこしたいというバーティ (Burty, パート・フランクリン氏の愛称) の遺志をどうお考えですか、ということばでした」と、齊藤氏はあとでわたしに話してくれた。

わたしは、予定どおり、点検作業をはじめた。フ氏の亡くなったあと、蔵書はすべて事務所に集められ、通りに面した2階の1室の三方にある天井までとどく書棚にぎっしり積み込まれていた。すぐ気がついたことは、書物の分類が、Kress, not in Kress となっていることであり、氏が「クレス文庫」を目標として書物を集めていたことが一目でわかった。この記号は、書物にも記されている。ゼンベリ氏は、調査期間中、いつもついていてくれた。彼は、イタリア人で、ボロニア大学の博士課程を出たそうである。専攻をきいたが、忘れてしまった。フ氏の事務所に来た年はきかなかつたが、「文庫」のなかの多くの書物を買う手伝いをしたといっていたから、かなり長い期間、事務所につとめていたようである。とにかく彼は、「文庫」の書物に精通していた。フ氏の手紙にある書物や史料を請求すると、たちまちとり出してきて、書物の特色、どこから買ったか、など色々面白い話をきかせてくれた。彼がイタリア人であったことも、わたしには幸いであった。というのは、彼の英語がたいへんききやすかったからである。

そのうち、ケンブリッジから、そのころハーヴァード大学に研究員として留学していた尾高煌之助助教授が応援にかけつけてくれた。尾高氏と岩井氏には、書物以外の史料の点検と、「文庫」の冊数の計算を担当してもらった。このようにして調査は快調に進行した。ある日、ゼンベリ氏やカプラン氏と、すぐ裏のレストランで夕食をして帰り、翌日事務所へ着いたとたん、カプランから「細谷さん、たいへんだ。昨日のレストランが火事で全焼した」といわれた。焼け跡へ行ってみると、そのレストランは、全く事務所の目と鼻のさきにあったのでひや汗をかいた。

わたしは、12日(月)の晩から、ちょうど学長が出かける前の朝8時ごろの時刻をねらって毎日電話をかけ、調査の進行状況を報告することとした。4日間でフ氏の手紙を資料とする現物の点検をほぼ終えることができた。手紙にあって現物がついに見あたらなかったものは、リカード

とマルサスの手紙だけであったように記憶している。また尾高班の作業の結果、パンフレット 2,644 件、政府文書その他の資料 4,400 件、マニュスクリプト・オートグラフ 889 件を数えることができた。ただし、この件数は、短期間の調査のため、数件が 1 冊に合冊されているばあいも 1 件に数えている。もしこれを 1 件づつばらせば、恐らく合計冊数は、さらに 5 千件ほど増えるのではないかと推定したが、のちに「文庫」が大学にはいつてから正確に 1 件ずつ数えた結果、この推計はそれ程外れてはいなかったことがわかった。一方、書物は 7,400 件と計算した。これもエルヴェシウスの "De L'esprit. Paris, 1758." のように 10 件のパンフレットが合冊されているものも 1 件と数えてある。

都留学長への定期便的連絡は、4 日か 5 日ほどつづけられたように思う。15 日 (木) には、わたしは、この「文庫」が、1 月 29 日の午後に学長室で予想したとおりのすぐれたコレクションであることを確認し、その旨を学長に伝えた。その週末の 17 日から 19 日までは、ワシントンバースディをはさんだ連休であり、わたしは、ポストンへいき、尾高氏の宿舎で休養した。翌 20 日 (火) から調査を再開した。このころからわたしは、パンナム・ビルの三井物産に須永次長を何回も訪ねて、米国三井物産が契約当事者になってもよいという東京本社からの指令がきたかどうかを尋ねた。わたしの発つ前に指令はついにこなかった。都留先生の記録により、あとから東京の状況を知ってみれば、これは当然であった。物産がエセル未亡人と正式に売買契約を結んだのは、それから 1 月以上のちの 3 月 26 日である。

斉藤氏は、その間シュノル氏と交渉をつづけ、「文庫」の最終売却価格を 105 万ドルとすることに成功した。はじめの価格は百万ドルであったが、競売のキャンセル料が 10 万ドル上積みされ、これを斉藤氏が交渉して 5 万ドル引き下げさせたのである。その話をきいた翌 23 日、わたしたちはホテルの朝食の席上、新聞の朝刊を見ておどろいた。ドルの暴落の記事がトップにあったのである。ドルはすでに 2 月 12 日に 10% 切り下げられていたが、この日 1 ドル = 260 円まで下ったではないか。これで 5 万ドルのキャンセル料を払っても充分にお釣りがくる勘定になった。わたしたちは、この幸運を喜び、一日も早く契約が成立することを祈って乾杯した。斉藤氏はこのあとすぐニューヨークを発ち、わたしと岩井氏が尾高氏にあとをお願いしてニューヨークを発つのは 2 月 25 日である。

3 月 26 日、フランクリン事務所でエセル未亡人と三井物産との間に売買契約書がとりかわされた。これには尾高助教授が立ち会った。契約の日から 8 日目に「文庫」の荷づくりがはじめられ、尾高氏が指揮をとったが、わたしが貴重書のとり扱いについて色々注文をつけたため作業はたいへんであったようである。荷づくりは 4 月 6 日に終り、「文庫」は船便で横浜に向った。

都留学長は、この間、奥野文部大臣に、大学が「文庫」を購入するための国費の援助を要請し、また三井物産をはじめとする三井グループ 22 社の寄付をお願いした。結局、国費から 5 千万円、残りの約 3 億円を三井グループから寄付を受け、大学は、色々の事情で 1 年以上たった 1974 年 9 月 16 日から正式に「文庫」の受入れをはじめることができたのである。

最後に、これまでの「文庫」の整理の経過を簡単に報告しておきたい。74 年 9 月 9 日、「文庫」の整理・運用の方針を審議するため、小泉図書館長を議長とする三井・フランクリン文庫協議会が発足した。また「文庫」の整理を担当する図書館側は、これと並行して 10 月 8 日、三井・フランクリン文庫事務系連絡会を発足させた。「文庫」の保管場所、暫定利用規則、仮目録の作成方式、整理要員の確保、など難問は山積していた。とにかく、ひとつひとつ問題を処理しながら、「文庫」の整理は少しずつ進められた。75 年 3 月から 4 月にかけて書物の言語別、著者別の書庫排列と、パンフレットの言語別、主題別区分、マニュスクリプトの年代別区分がほぼ完了した。5 月から暫定利用規則による学内閲覧もはじめられ、6 月から仮目録の作成にとりかかった。

ここでは是非記録にのこしておきたいことは、75年9月からハーヴァード大学の「クレス文庫」の主任 (curator) カーペンター (Kenneth E. Carpenter) 氏が10ヶ月間、「文庫」の整理のために大学図書館に勤務したことである。わたしは、1970年に同文庫を訪ねてカ氏のお世話になったことがあった。フランクリン氏はさきに述べたように、「文庫」の収集の際、いつも「クレス文庫」を念頭においていたからカ氏とは絶えず接触があった。「文庫」がニューヨークを離れるときに、エセル未亡人は、「文庫」の目録が完成した暁には、ぜひカ氏に序文を書いてもらいたい、と尾高氏に頼んだのはそういういきさつがあったからである。尾高氏はこのことを学長に伝えた。これがきっかけとなってカ氏が来日することとなったのである。ところが、実際にカ氏と交渉をはじめてからの学長のご苦労はたいへんなものであった。国立大学で教官以外の事務職員として外国人を招くことは、想像以上にむずかしいことであった。

すべての問題が解決して9月1日、カ氏一家 (夫人と3人の娘さん) は、羽田に着いた。カ氏を迎えて「文庫」の整理は急ピッチで進化した。おどろくべきことに彼は、学長から招待の手紙をもらった直後から来日に備えてハーヴァード大学で日本語速成コースをとって勉強をはじめていた。来日したときにはもうかなり日本語をしゃべれるようになっていた。彼は、アメリカでも数少ない (というよりはただ1人の) 経済思想史、経済史にくわしいライブラリアンである。英、独、仏、伊、スペイン、オランダ、スウェーデン、ロシアの各国語に通じ、ラテン語もできる。「文庫」の購入がきっかけとなってカ氏を呼ぶことができたのは日本の図書館学、書誌学の水準を国際的に引き上げる大きな刺戟となったと、わたしは考えている。カ氏は9月から契約書にしたがって着々と仕事を進め、マニュスクリプト・オートグラフのすべての目録をつくり、また「文庫」の整理方針についても貴重な助言を絶えずしてくれた。すべての義務を果たしてカ氏一家は76年6月28日羽田を発った。その後「文庫」の目録作成作業は順調に進み、1978年3月「文庫」の仮目録 “CATALOGUE OF THE BURT FRANKLIN COLLECTION — DONATED BY MITSUI GROUP COMPANIES — Preliminary Edition — 1978, xxiv, 598 p.” が刊行された。この目録につけられた Introduction は、カーペンター氏書いたものであり、フランクリン氏の小伝と「文庫」の大要、その特色、「メンガー文庫」を持つ一橋大学にこの「文庫」がさらに加わったことの意味が簡潔に述べられている。

最後に私事にわたって恐縮であるが、わたしは、本年3月をもって一橋大学を退官することとなった。35年6ヶ月の勤務期間中には色々の事件があったが、そのなかでも「フランクリン文庫」の入手にかかわった思い出は、わたしにとって忘れがたい。

(社会科学古典資料センター教授)